

平成 29 年 度 学 校 評 価 書

| | |
|-----|-------------|
| 学校名 | 兵庫教育大学附属幼稚園 |
|-----|-------------|

1 学校教育目

| | | | |
|------------------|------------|--------------------|------------------|
| 心身ともにたくましい子どもの育成 | ○ 健康な体の子ども | ○ よく考えて最後までやりぬく子ども | ○ やさしく豊かな心をもつ子ども |
|------------------|------------|--------------------|------------------|

2 本年度の重点目標

| | |
|-------------|---|
| (1) 園運営 | <ul style="list-style-type: none"> ・園運営が主体的かつ円滑にできるよう、園長のリーダーシップのもと、職員一人一人が明確な目的をもって力を合わせて取り組むよう努める。 ・記録をもとに話し合い、幼児のよさを職員間で共有することを通して、研究テーマ「保育の質を高めるために一子供のよさが学びにつながる保育に向けて」（二年次）に迫る。 ・研究活動の成果を生かしながら、「うれしのタイム」における幼児の自発的な活動としての遊びを通じた教育の充実を図る。 ・保護者の子育て力向上を支援する取り組みや子育て環境をよりよくするための取り組みを行い、子育て支援事業の充実を図る。 ・大学との連携では、大学教員を招聘しての研究活動や親子活動、保育活動を計画的に推進し、日々の保育へつなげるよう努める。 |
| (2) 教育研究活動 | |
| (3) 他校種との連携 | |

3 自己評価結果（達成状況）【A：達成している B：概ね達成している C：あまり達成していない D：達成していない】

| 分野・領域 | 評価項目（取組内容） | 取組達成の状況 | 評価 | 改善の方策 |
|-------|---|---|----|---|
| 園運営 | ○組織運営 ・職員一人一人の主体的な取り組みを促すよう、園長がリーダーシップを發揮し、大学と一体となった園運営を行う。 | <ul style="list-style-type: none"> ・各教員が自己目標を定め、常に意識して園運営、学級運営に主体的に取り組めるよう、教員会議の場やその他の場面で機会を捉えながら管理職が指導助言を行った。 ・園務がスムーズに遂行されているかを教員会議等の場において点検するとともに、附属学校運営委員会での審議をふまえながら、園長のリーダーシップのもと、大学と一体となった園運営を行った。 | B | <ul style="list-style-type: none"> ・今後も園長のリーダーシップのもと、教員会議や園内研修、情報交換等を通して共に学び合い、幼稚園全体の保育の質をより高めていくように取り組んでいきたい。 |
| | ○学年、学級経営 ・目指す各学年や学級の姿に向け課題を確認しながら、計画的に保育を行う。 | <ul style="list-style-type: none"> ・学年経営及び学級経営の方向性や課題を明らかにし、今年度の保育の方針を立てた。学期ごとに振り返り、達成状況や課題をまとめ、教員会議で方向性を確認しながら保育に取り組んだ。 ・学期ごとの学年・学級経営や、行事ごとの振り返りなどの反省や評価を、会議等で検討し、教員相互で保育の質を高める努力をした。 ・朝の打ち合わせ時には、各担任より本日の保育のねらい及び課題を明確にし、学年担当副担任や他学年の教員とも共通理解を図り、保育を行うとともに日々の振り返りを翌日に生かすよう努めた。 | A | |
| | ○説明責任 ・本園の教育方針や保育の内容については、管理職や担任が機会を捉え、話したり文章にしたりして、伝えていく。 | <ul style="list-style-type: none"> ・「ふよっこだより」を年22回発行し、教育方針や園で行われる保育の内容、各行事の主旨・取り組み等を伝え、園の保育や幼児の育ちに保護者の理解が得られるようにした。 ・主な行事ごとに保護者にアンケートを依頼し、保護者の意見や要望をふまえ、行事の成果や課題等を「ふよっこだより」で伝えた。 ・降園時には、各担任から学級の保護者に対して、その日の幼児の姿をもとに、保育のねらいや幼児の育ちを伝えるようにしている。また、園長が儀式的行事の後に本園の教育方針について説明する、副園長が年2回の学級懇談会に参加する、さらに登降園時に機会を捉えて日常的に保護者と話すことで本園の運営について理解を得るようにした ・園の教育を理解してもらうため、全学年の保育参観及び保育参加日（「ふよっこだより」）を年7回実施し、保育を見る観点を事前に伝え、当日その場で機会を見つけて保護者に説明をし、理解を得るように努めた。 | B | <ul style="list-style-type: none"> ・「預かり保育」利用者は、日々の保育説明を担当より直接聞く機会が他の保護者に比べて少ないため、迎えの時間を利用して意識して話す機会を作ったり、学級通信や、掲示等を活用したりするなど工夫していきたい。 |
| | ○危機管理体制 ・「附属学校園における安全確保及び安全管理の手引き」に基づき、毎月実施の「子供安全の日」における安全教育への意識付け(避難訓練等)及び施設設備の点検とその改善・拡充に取り組む。 | <ul style="list-style-type: none"> ・園内の施設、設備、備品等の安全点検を随時行うことに加え、昨年度に引き続き、PTA役員による安全点検も行い、より細部にわたっての点検と迅速な改善を行った。 ・毎月1回「子供安全の日」を設け、避難訓練や学年に応じた安全指導を行った。避難訓練では、火元や第一発見者を事前に知らせず実施したり、実施日を知らせず実施したりするなど、職員の対応力を高める訓練を取り入れた。さらに、今年度も、附属小学校と合同での不審者対応訓練や、保護者と連携しての引き渡し訓練、消防署員を招聘しての訓練も行った。また、附属三校園合同の避難訓練を次年度に実施するための具体的な検討も進めている。 ・幼児の怪我や疾病等緊急時の初期対応を適切にできるよう、職員の研修を行ったり、消防署員を招いての心肺蘇生法講習会を開催したりした。 | A | |

4 分野・領域ごとの学校関係者評価

| 学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価 |
|---|
| <p>【総評】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「うれしのタイム」の充実、日々の職員間の打ち合わせと振り返り、大学等との連携、あと伸びする生きる力の育成、一人一人を大切にされた保育等、充実した保育は、附属幼稚園の財産である。そのよさをどうやって知ってもらうか、広げていくかが課題である。 ・多くの方々に見られる大変な環境で、先生たちは凄く頑張っている。子供たちの前では元気な姿で保育をしてほしいので、頑張りすぎないようにしてもらいたい。また、長年にわたって働いている先生が附属幼稚園にいることは、保護者の安心につながっている。 <p>【園運営】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・妥当な自己評価である。 <p>○組織運営</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教員確保は喫緊の課題である。 ・やしろうども園との棲み分けについては、考える力を育てるなどをアピールし、教育内容で競っていく必要がある。 <p>○説明責任</p> <ul style="list-style-type: none"> ・おたよりや日々の話で、しっかりと伝えているのでよい。ただし、おたよりが詳細で読みづらい親もいるので、わかりやすく伝える工夫もしてほしい。 <p>○危機管理</p> <ul style="list-style-type: none"> ・様々な場面を想定しての避難訓練は大切なことであるので、今後も継続してほしい。 ・他附属の行事変更などで駐車場が混雑することがあったので、可能な範囲で連絡があるとよい。ミマモルメの活用をもっと考えてはどうか。 |

| 分野・領域 | 評価項目（取組内容） | 取組達成の状況 | 評価 | 改善の方策 |
|--------|--|---|----|-------|
| 教育研究活動 | <ul style="list-style-type: none"> ○教育活動 ・研究活動の成果を生かしながら、「うれしのタイム」における幼児の自発的な活動としての遊びを通じた教育の充実を図る。 | <ul style="list-style-type: none"> ・「うれしのタイム」は、自発的な活動としての遊びの中で、自分をコントロールする力や最後までやり抜く粘り強さなどの幼児期に育てたい力を培う重要な活動であることを再認識し、研究テーマとの関連で、日々の保育の記録を基に継続して事例収集と検討を行うことで、環境を整えていった。 ・三年間の教育課程をもつ幼稚園として三年間の幼児の育ちを見通した保育が行えるよう、教員間での保育観や子供観の共有に向けて学期ごとに点検を行った。 ・園行事においては、担当者の計画のもと、行事の主旨やねらい、取り組みの方向について共通理解するとともに、行事後には、保護者アンケートも参考に振り返りを行い、次年度につながるようにした。 | A | |
| | <ul style="list-style-type: none"> ○幼児理解 ・幼児一人一人の特性に応じた適切な指導ができるように、キンダーガーテンカウンセラーのアドバイスも参考に職員間で情報を共有し指導にあたる。 | <ul style="list-style-type: none"> ・キンダーガーテンカウンセラーに、各クラス学期に2～3回観察してもらい、個々の幼児に応じた指導方法のアドバイスを受けたり、保護者の相談へとつないだりすることで、より個の特性に応じた指導が行えるように努めた。キンダーガーテンカウンセラーからのアドバイスが記載された記録を必要に応じて閲覧したり、全職員参加の園内委員会（年3回）を開いたりし、情報が共有できるようにした。個別の指導計画は、定期的に見直し、次年度に引き継げるようにしている。 ・今年度は、加東市発達サポートセンターはびあによる加東市在住幼児に対する個別指導を受ける場を年2回もった。 ・就学に向けて、希望進学先調査を行い、必要に応じて各小学校と連絡を取り合い、日常の幼児の様子を見てもらう機会を設け、進学先のスムーズな決定と進学後の適切な受け入れ準備を図った。また保護者からの進学相談にも担任や管理職があたり、就学予定校や加東市保健センターとも連携を図った。 | A | |
| | <ul style="list-style-type: none"> ○研究活動 ・職員間で幼児のよさを共有し保育の質を高めることを目的とした、研究テーマ「保育の質を高めるために一子供のよさが学びにつながる保育に向けてー」（二年次）を追求する。 | <ul style="list-style-type: none"> ・昨年度に引き続き記録から子供のよさを全職員で共有し、その子のよさを伸ばしながら、学びや育ちにつながるような環境構成や教師の援助について検討を重ねた。 ・研究二年次の成果として、以下の3点が挙げられた。①教師が連携し、よさが生かされる保育を考えることができる②子供の具体的な興味・関心が見え、今の学びをより充実させるための環境や援助のタイミングが見えてくる③次の学びを捉えられるようになり、子供の主体性と教師の意図の絡み合った環境や援助が考えられる。 | A | |
| | <ul style="list-style-type: none"> ○子育て支援事業 ・保護者の子育て力向上を支援する取り組みや子育て環境をよりよくするための取り組みを行い、子育て支援事業の充実を図る。 | <ul style="list-style-type: none"> ・機会を捉えて幼児期の育ちについて伝えていくとともに、「ふよっこデー」の実施や「きっすくらぶ」による保護者の保育参加など、保護者の子育て力向上を支援する取り組みを行った。 ・預かり保育の充実を図った。具体的には、就労支援だけでなく、就学支援、介護、出産等に対象を広げ、保育時間終了後及び長期休業中だけでなく、幼稚園の代休日や早朝の時間の預かり保育も実施した。登録者数延べ79名であった。 ・子育て環境をよりよくするための昨年度に引き継ぐ取り組みとして、附属小学校の参観及び懇談日に、一時預かり保育を実施した（1回目は7月、2回目は3月、利用者はともに33名）。また、複数在園児の場合の保育時間差に対応し、親子で弁当を食べたり遊んだりする時間と場の提供も行った。利用者は2～5組ほどである。 | A | |

| 学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価 |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> 【教育研究活動】 ・妥当な自己評価である。 ○幼児理解 ・幼児理解としては十分評価できるが、特別支援教育として見ればもう少しできることがあるようにも思う。クラスにやや目に付く子供がいることは、保護者にとっても気になる部分であり、早期支援が必要な場合もある。 ○子育て支援事業 ・預かり保育担当者がいることはよい。 ・卒園児やその保護者から、在園児の保護者に対して、園生活を体験することでどのような力が身に付いたかなどを語ってもらう機会をもつこともよいのではないかと。 |

| 分野・領域 | 評価項目（取組内容） | 取組達成の状況 | 評価 | 改善の方策 | 学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価 |
|--------------------|---|--|----|---|--|
| 地域への貢献 | <p>○開かれた幼稚園づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> 地域の未就園児親子参加の「子育てひろば」を年間を通して実施するとともに、子育て支援ルーム「かとうGENKI」とも連携して、地域、幼稚園、家庭が共に育つ活動を展開する。 <p>○研究発表や公開保育</p> <ul style="list-style-type: none"> 年2回の研究発表会を通して、研究の成果を発表し、地域及び社会に貢献する。 | <ul style="list-style-type: none"> 未就園児親子参加の「子育てひろば」の回数を昨年度より増やして、年15回実施した。年間の登録者数は、79組（2月現在）である。活動時間は約2時間で、活動の前半は「うれしのタイム」で在園児と共に遊び、後半は遊戯室において、クラス単位で在園児や保護者有志と共にする活動、園長、副園長による子育てワンポイント講座、触れ合い遊び、大学院生による楽器遊びなど内容を工夫した。 昨年度途中よりPTA活動の活性化のため、手芸部の活動場所をやまくにプラザ内に移動した。今年度は定期的に週1回活動したことにより、子育て支援ルーム「かとうGENKI」利用者にとっても参加しやすい雰囲気となり、参加も増え、本園のPTA活動の啓発にもつながった。 今年度より、PTA広報部が年2回発行する園の生活やPTA活動を紹介した壁新聞を、幼稚園内だけでなく「かとうGENKI」にも掲示することで、情報提供を行った。 今年度より、月ごとの行事を中心に幼稚園の様子をホームページに掲載し、情報の発信を行った。 | A | | <p>【地域への貢献】</p> <ul style="list-style-type: none"> 妥当な自己評価である。 <p>○開かれた幼稚園づくり</p> <ul style="list-style-type: none"> ホームページに園の様子を紹介していることは評価できる。スマホ等で手軽に分かるような発信もしていくとよい。卒園児の声の掲載や動画など、できる範囲でPRすることを考えてはどうか。 <p>○研究発表や公開保育</p> <ul style="list-style-type: none"> 土曜日開催による発信はよい。研究を通して地域に成果を発信し広げることが、園経営としても大切である。 |
| 他校種（小・中・高校・大学）との連携 | <p>○校種間連携</p> <ul style="list-style-type: none"> 近隣の高校も含めた他校種と連携し互恵性のある交流活動を行う。 | <ul style="list-style-type: none"> 5歳児がスムーズに就学できるように、附属小学校児童の通学班と共に、親子での通学体験（3月に2回実施）に加え、昨年度に引き続き幼稚園児用に給食用の食缶を購入し、5年生に準備と片付けを手伝ってもらいながら附属小学校の多目的室で給食体験を行った（1月と2月の2回実施）。 附属小学校との交流では、5歳児が5年生と11月に、1年生と3月に交流給食を実施した。 附属中学校との交流では、4・5歳児と3年生間で、中学生がペアの園児に手作りの玩具を持参したり、一緒に遊んだりした（7月と9月）。 県立社高等学校との交流では、1年生が「触れ合い育児体験」として、園児と一緒に遊んだり弁当を食べたり、体育科生徒が集団行動を見せたりした。 本園職員が県立社高等学校の授業に、職業紹介の講師として参加協力した。 附属三校種の教員間の連携として、三附属連携推進協議会において、三附属の教員が各部会に分かれ情報を共有するとともに、幼小中の連続性に着目したカリキュラム作成に取り組んだ。 | B | <ul style="list-style-type: none"> 三附属連携推進協議会において作成中のカリキュラムを完成させ、幼小中の接続をより着実に図っていくようにしていきたい。 | <p>【他校種との連携】</p> <ul style="list-style-type: none"> 妥当な自己評価である。 <p>○校種間連携</p> <ul style="list-style-type: none"> 単なるイベントではなく互いの教育を見合ったり、子供同士の多様な交流を行ったりするなど、今後も積極的に進めてほしい。連続性に着目したカリキュラムにも期待したい。 |
| | <p>○実地教育(教育実習)</p> <ul style="list-style-type: none"> 大学教育とつながりをもった効果的な初等基礎実習を実施する。 | <ul style="list-style-type: none"> 各クラスで行う反省会に大学教員が参加し、大学のリフレクション（授業）と連携をもたせ、より効果的な指導を行った。 実習生には、実習後も本園の研究発表会への参加（大学の授業「教職実践演習」の一環）並びに運動会、生活発表会等の園行事の参観を呼びかけ、多くの参加者があった。 幼稚園教育要領の改訂に伴い、初等基礎実習（幼稚園実習）テキストの作成を大学教員と共同で行った。 | A | | |
| | <p>○大学との連携</p> <ul style="list-style-type: none"> 大学教員を招聘しての年2回の親子活動や年4～6回の保育活動を推進したり、園内研修会に参加、助言を求めたりするなど大学との連携を密にした取り組みを行う。 | <ul style="list-style-type: none"> 幼年教育・発達支援コースの大学教員には、本園の保育の質の向上と研究推進のために、園内研での指導助言や研究発表会の講師やオブザーバーとしての参加を得た。 3・4歳児の親子活動（各年1回）、4・5歳児の陶芸活動（4歳児2回、5歳児1回）を大学教員指導のもと実施した。親子活動は、それぞれの年齢や発達に合った内容で、親子の触れ合いのよい機会となった。陶芸活動は、ここ数年大学キャンパスでの活動が継続されており、本格的な陶芸体験ができた。また、大学キャンパスでの活動が有意義な体験となるよう、大学構内散策や食堂で昼食をとる機会も設けた。 | A | | |

